

## 1. 幼若期口腔組織の放射線障害に関する実験的研究

○久芳 陽一, 吉田 穂 (福歯大・小児)  
木村 光孝 (九歯大・小児)  
楊 榮展 (九歯大・放射線)

数年前より九州歯科大学小児歯科学教室の池田や瀬尾らは乳歯列期の顎骨の放射線照射について、肉眼的、X線学的、病理組織学的および光学的に報告し、河井らは歯根未完成歯の顎骨にX線を照射し放射線照射による影響を病理組織学的に報告している。しかし、幼若期における放射線照射による皮膚、口腔内組織の状態を観察した報告はほとんどないようである。そこで演者らは、幼若期（歯根未完成歯）の顎骨にX線を照射し、放射線照射による影響を肉眼的ならびにX線学的に検索を行ってみたので報告する。

実験には生後6～7カ月前後の幼若犬（幼若期）の歯根未完成歯を用い、下顎左側第3小臼歯を中心としてX線照射を行った。X線照射は信愛号（島津製）を使用し、管電圧200kVp、電流20mA、filter: 0.5mmCu+1mmAl、FSD: 40cm、HVL: 1.5mmCu、照射野: 4cmφ、1,000R/回/3日で行った。総線量は3,000Rである。肉眼的観察は照射前より薬殺するまで毎日一定の時刻に観察した。観察対象は第3小臼歯相当部皮膚で、照射野の被毛、皮膚などであり、口腔内所見としては、粘膜、歯肉、歯牙、唾液などである。X線学的観察は、照射前および照射後1カ月ごとに撮影し、撮影方法は歯根尖撮影法であり、Kodak dental ultraspeed filmtype DF 58と54を使用して撮影した。肉眼的所見ならびにX線学的所見ともに照射後1週目から8カ月までの観察を行ったので報告する。